

## 論文

## 纏向遺跡辻土坑4出土脚状木製品の検討

鈴木裕明<sup>i)</sup>

**要旨** 古墳時代前期初頭の纏向遺跡辻土坑4は、大型で湧水層まで掘り下げられた形状や出土遺物の内容から、「纏向型祭祀」が提唱された重要な遺構である。特に出土した木製装飾高杯や団扇形木製品、精製剝物腰掛は、埴輪や古墳副葬の石製品に写されることから、奈良盆地の大型前方後円墳に葬られる首長が主宰した祭儀に関わる器物として注目されている。今回辻土坑4出土のこれらの特殊な木製品群に加えるべく、脚状木製品を取り上げた。まずこの木製品の形態・木取り等の特徴を明らかにし、弥生時代後期の青谷上寺地遺跡に分布の中心がある脚状木製品と比較検討した。その共通性について確認し、青谷上寺地遺跡例を祖型にして辻土坑4例が成立したと考えた。辻土坑4例独自の特徴として、左右対称と曲線の造形と、ヒノキの芯去り材という点を見出し、青谷上寺地遺跡例からの形態の進展、用材と木取りの変換を確認した。そして特殊な木製品群がセットで出土する遺跡と分布の検討から、弥生時代後期～古墳時代前期初頭に青谷上寺地遺跡を中心に山陰で特殊な木製品群が成立し、同時期には北陸へ展開し、古墳時代前期前半には奈良盆地東南部での展開、同時期には琵琶湖南岸・東岸へ、そして北陸にも遡上することを明らかにした。さらに辻土坑4出土脚状木製品と奈良盆地の古墳出土円形有脚合子形石製品の脚部との比較から、その細部の造形において辻土坑4例の特徴が表現されているとみて、この脚状木製品が木製合子の身に装着された形が石に写され、円形有脚合子形石製品が成立したと考えた。辻土坑4出土脚状木製品が、古墳時代前期初頭～前半に王権中枢でおこなわれた祭儀で使用した特殊な木製品群の一つであり、そのような祭儀の主宰者が葬られる古墳の副葬品として仮器化の対象になったものであったと結論付けた。

**キーワード** 纏向遺跡辻土坑4、青谷上寺地遺跡、脚状木製品、特殊な木製品群、合子形石製品

## I. はじめに

古墳時代前期初頭の纏向遺跡辻土坑4は、大型で湧水層まで掘り下げられた形状や出土遺物の内容から、「纏向型祭祀」が提唱された学術的に重要な遺構である(石野1976c)。出土した古式土師器は古墳時代前期の土器編年研究の定点となった資料であり、外来系土器は、中央と地方の関係性が形成されつつあったこの時期の地域間交流の検討対象になってきた(石野・関川1976)。また、多種多様な木製品や有機遺物の出土があり、祭祀の復元において重要な要素として評価されており(石野1976b)、特に木製装飾高杯(飯塚2003、石川2019)や団扇形木製品(鈴木裕明2001・2003)、精製剝物腰掛(鈴木裕明2019・2021)等は、特殊で希少なものであり、埴輪や古墳副葬の石製品に写されることから、奈良盆地に営まれた大型前方後円墳に葬られるような首長が主宰した祭儀に関わる器物として注目されている。

今回この特殊な木製品群<sup>(1)</sup>に加えるべく、発掘調査報

告書『纏向』(石野・関川1976)の図151-13で報告されている木製品を取り上げる。報告書では、一木から柄部と杓部が作り出された杓子のような木製品とし、「杓部の先端が左右対称に拡がり、中央部をやや中くぼみに削り、先端を最も厚く作り、さらに先端は裏面より斜めに切断して鋭い刃状にするという形状である」と説明している(辻1976, pp. 300-301)。杓部が米飯をすくうのに適した部位とし、「しゃもじ」のような用途で使用されたのであろうとした。なお、木取りは板目で、樹種はヒノキである。この木製品については、その後特に検討が加えられることはなく、報告書の内容に疑義が示されることもなかった。

近年になって、鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡(北浦2001、湯村2002、野田・茶屋2005等)や石川県小松市白江梯川遺跡(久田2024)から弥生時代後期～古墳時代前期初頭にかけての精巧な木製品を含む多種多様な木製品が大量に出土していることが、調査報告書等から知られるようになった。そのなかに、赤彩された、精巧な

i) 橿原考古学研究所 すずき ひろあき

作りの組み合わせ容器脚とされる木製品の報告がある。後述するように筆者は、これらの木製品と辻土坑4出土の木製品の類似性が高いことに注目し、さらにこの種の木製品を検討した唯一と言っていい樋上昇氏の論考(樋上2010)にふれ、辻土坑4例が組み合わせの容器脚になる木製品(以下、脚状木製品と表記)である可能性が高いと考えるようになった。また、青谷上寺地遺跡例と白江梯川遺跡例を実見し、共通性について改めて確認することができたことから、これらの地域の脚状木製品を祖型にして辻土坑4例が生み出されたと考えるに至った。

本稿では辻土坑4例が脚状木製品であることの蓋然性を、類似する形状の木製品との比較検討から導き出し、所属時期・共伴木製品・分布から奈良盆地東南部にもたらされた過程・背景、当該木製品のもつ性格等について考えてみたい。

## II. 纏向遺跡辻土坑4出土脚状木製品

### (1) 辻土坑4例の形態と用材(図1)

#### ①形態

脚状木製品と考えた辻土坑4例は、上半の軸部と下半の脚部が一木から作り出されている。全長は17.6cmである。上半の軸部は、断面横長長方形で脚部より一回り小さく角棒状に作り出され、上端は丸くおさめる。幅は1.2~1.4cmである。また、上端に向けて厚みが徐々に減じる形となり、内側は垂直で平坦に、外側はわずかに斜面を形成する形に仕上げられている。上端はやや鋭く丸みを帯びた形になる。厚さは0.4~1.2cmである。上端には内外面中央を貫通する直径約0.4cmの小孔が一つ穿たれている。脚部は平面でみると左右対称な撥形を呈し、中位でくびれて下端に向かって裾広がりとなる。脚部長は9.8cmで、幅は上端で2.4cm、最も幅を減じる中位で2.2cm、下端で4.6cmである。側面で見ると内側は軸部から連続して平坦に仕上げられ下位内側の屈曲部に至る。一方外側は、軸部との境で段を形成し、脚部の上端に軸部の三方を取り巻く幅0.2~0.4cmの平坦な面を設けている。この段から外反する形で緩やかに湾曲して下端に至る。下端の外側は幅1.5~2.0mmで面

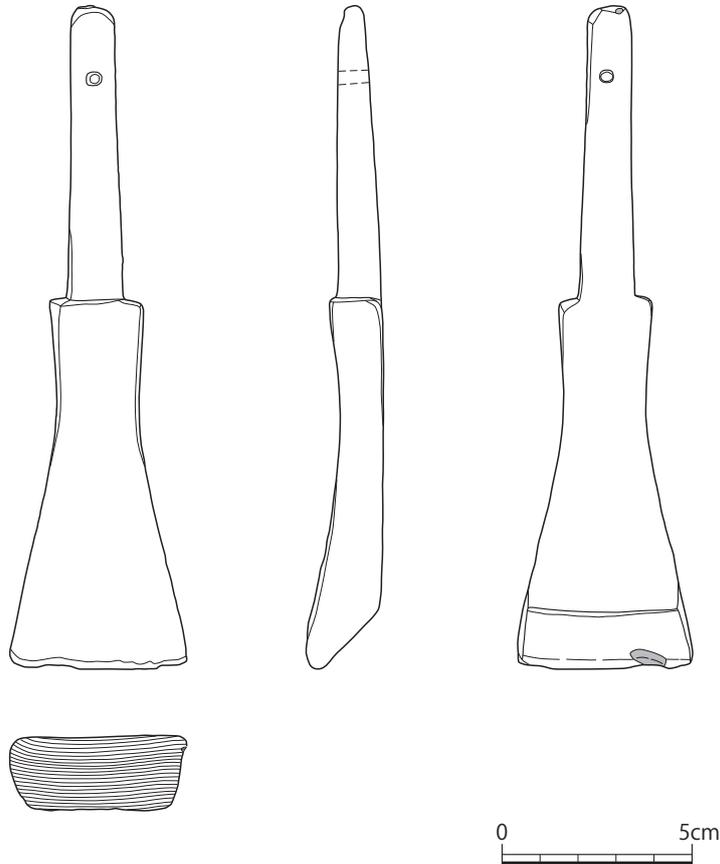


図1 纏向遺跡辻土坑4出土脚状木製品実測図(S=1/2、木取り表現は下端面に年輪曲線を入れたもの、アミは欠損部分)

取りされ、丸みを帯びた面が形成されている。脚部の厚さは上端で1.4cm、最もくびれる中位で1.1cm、最も厚くなる内側下位の屈曲部で1.8cmである。その内側屈曲部から下端にかけて長さ2.2cmの斜面が形成される。この斜面は軸部から脚部の内側を垂直に置いた場合、約45°の傾斜になる。表面に彩色等は認められず、白木のまま滑らかな仕上げであったとみられる<sup>(2)</sup>。

## ②樹種と木取り

辻土坑4例の樹種は、前述のようにヒノキであることが判明している。ヒノキを用材として、一木から軸部と脚部を作り出したもので、木取りは上下端面を木口面側にして、外面側を木裏にする板目材である。年輪は緻密で緩やかな弧で曲線を重ねており、樹心に近い位置ではなく、樹皮に比較的近く安定して年輪を重ねている部分を材として用いたとみられる。この状況からみてヒノキの大径木を用材としている可能性が高い。後述するように今回比較検討する山陰や北陸の脚状木製品は主にイヌガヤを用材とした芯持ち材であることが多く、用材において樹種選択とそれにとまなう木取りが変換されたことがうかがわれる。

## (2) 出土遺構と共伴遺物 (図2)

脚状木製品が出土した辻土坑4は、纏向遺跡前半段階(庄内式期)の中核といわれる掘立柱建物群があるトリイノ前地区(橋本2013)の西側に展開する土坑群の中にあり、さらに西側には纏向石塚古墳、勝山古墳、矢塚古墳が立地する。土坑の平面は径約3m×3mの不整円形で、深さ約1.5mを測る大型のものである(石野1976a)。湧水層まで掘り込まれ、常時水が湧く状態であったようである。土坑内の堆積土の状況は、上中下の大きく3層に分けられ、上層からは纏向4式、中・下層からは纏向3式の土器が出土している。今回俎上にあげた脚状木製品をはじめ、木製品の多くは中層<sup>(3)</sup>から出土している。中層は穀殻を主体とする植物層や炭層が介在する厚さ最大約0.7mの分厚い層で、河内、東海、山陰、北陸等の外来系土器も多く含んでいる。脚状木製品と共伴する中層から出土した木製品には、装飾高杯・槽・盤・蓋の容器、団扇形の威儀具、刳物腰掛の調度、舟形・鳥形の祭祀具、祭祀具の可能性ある精製の横槌、端部に抉りをもつ有頭棒状の継ぎ手・仕口材、そのほか棒

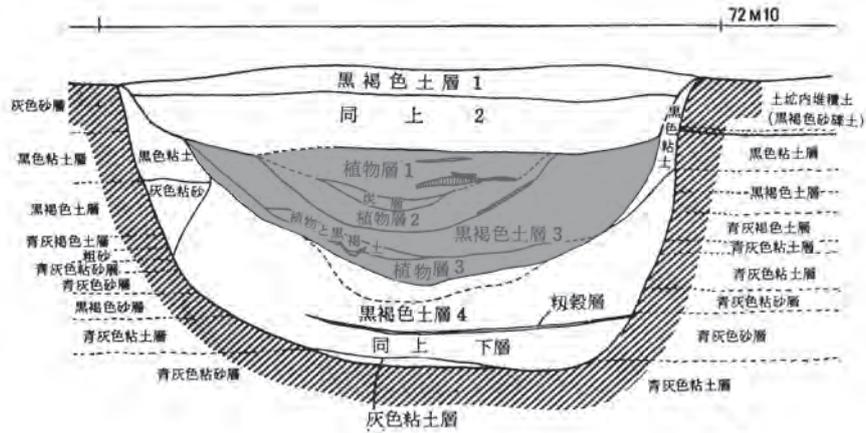
状・板状の製品、ヒノキやコウヤマキ製の残材とみられるもの等がある(辻1976)。これら木製品や残材には一部に火を受けたものが多いのが特徴である。調査担当者の石野博信氏は、このような土坑の内容と隣接地で検出された掘立柱建物の存在から、土坑周辺で「水と火のまつり」がおこなわれたと想定されている(石野1976b)。その具体的内容は、「稲粃を脱穀し、炊飯し、盛りつけ、儀礼ののち共食する過程が考えられる」とする(石野1976b, p. 508)。そして多数出土している外来系土器とともに、新嘗祭における地方豪族からの食物共献儀礼である「ニイナメオスクニ儀礼」の系譜に連なる祭儀の可能性を指摘している。石野氏は、このような出土遺物をとまらない水と火を用いた祭祀を前述のように「纏向型祭祀」と名付け、さらに鈴木敏弘氏は、古墳時代前期の列島各地の祭祀に影響を与えた可能性を考えている(鈴木敏弘1994)。具体的な祭祀の内容あるいは性格については、今後も検討していくべき事柄と考えるが、その際に重要な要素となるのが、前述の筆者がこれまで検討してきた団扇形木製品、刳物腰掛であり、同様に複数の既往研究がある木製装飾高杯であり、そして今回俎上にあげる脚状木製品である。

## III. 脚状木製品の既往研究と類例

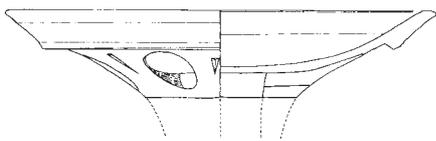
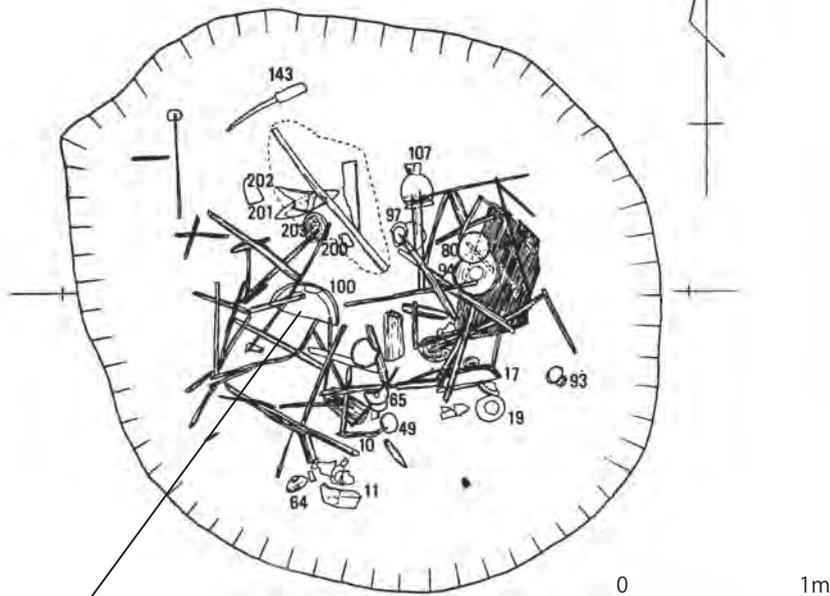
### (1) 脚状木製品に関連する既往研究

ここでは脚状木製品に関連した既往研究をみていきたい。組み合わせで用いられる脚状木製品に注目し全体像を最初に復元したのは、山田昌久氏である(山田1997)。曲物の民俗事例を引用しながら、考古資料の曲物が底板・側板・蓋板の3要素で考えられてきたことに加えて、脚や把手の存在を指摘している。そして曲物容器想定復元図のなかでこの脚状木製品について、脚としての用途を提示している(図3)。同様の復元は、穂積裕昌氏が三重県津市六大A遺跡の発掘調査報告書のなかで提示している(穂積2000)。出土した脚状木製品を曲物脚とし、脚下半の方形台部に曲物の底をのせ、上半部分で曲物側板と皮紐結合し、さらに紐が緩まないよう木栓を挿入して強固に固定したと具体的に曲物と脚の結合方法を示している。

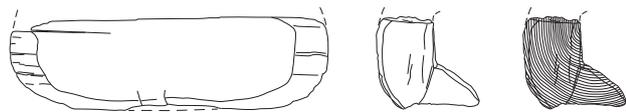
この種の木製品を集成し、体系的に検討を加えたのが前述の樋上昇氏である(樋上2010)。まず愛知県清須市・



(アミは特殊な木製品群の出土層位)



木製裝飾高杯 (ケヤキ、黒色粘質土 (植物層 2)、100)



割物腰掛 (コウヤマキ、植物上層)  
(アミは炭化部分)



団扇形木製品 (ヒノキ、植物層 1) 脚状木製品 (ヒノキ、植物上層)  
(アミは炭化部分)

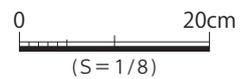
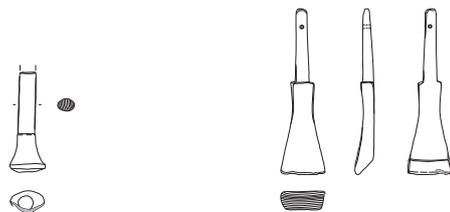


図2 纏向遺跡辻土坑4 平面・断面図、出土の特殊な木製品群実測図

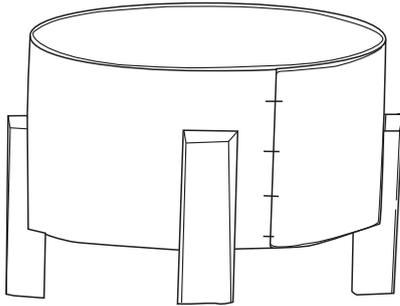


図3 曲物容器脚の復元想定図

名古屋市朝日遺跡から出土している弥生時代後期の木製容器（永井・赤塚 2009）の検討で、脚状木製品にふれ、脚端部が強く外へ踏ん張るタイプで、外面が赤彩されるガマズミ属近似種製の事例と直線的で身を受ける段が作り出されたスギ製の事例を紹介している。これらは身と別づくりの容器脚と位置付けている。朝日遺跡例の脚状木製品には、「身を受ける割り込みが浅く、下端部が強く外反するタイプ」と「ほとんど反りをもたないタイプ」があり（樋上 2010, pp. 65-66）、他遺跡にそれぞれの複数の類例があることを提示している。前者タイプには本稿でも検討をおこなう青谷上寺地遺跡例と白江梯川遺跡例等をあげる。青谷上寺地遺跡例では15点の出土があり、出土状況から3～4点をセットとして、身に結わえて用いていた可能性が高いことを指摘する。さらに前述の山田氏の復元案を提示しつつ、後者タイプの脚は曲物の脚であることを肯定的にとらえるが、前者タイプについては、脚が固定されていた身が、挽物、曲物、刳物等のいずれかであるかは明らかでないとする。ただし、赤彩や精巧なつくりから格の高い容器であったとし、3ないし4本の反りが強い脚で支えられ、その脚の中位横方向に溝を刻んだものであることから、古墳時代前期に石に写される円形有脚合子形石製品のモデルであろうとした。筆者もこの樋上氏の見解に加えて、本稿で検討する纏向遺跡辻土坑4例の存在から、円形有脚合子形石製品のモデルになった容器の脚であることに賛同するところである。

合子形石製品のモデルについての検討は、先学によっていくつかおこなわれている。合子形石製品を最初に系統的に研究された代表的な論考は、西谷真治氏によるものである（西谷 1970）。合子形石製品を円形有脚と楕円形無脚に大きく分け、孔の有無や材質等で細分してい

る。モデルは木製品とするのがもっとも妥当な推測とし、木製合子にも円形と楕円形の二つの型式があったとする。そして円形有脚合子形石製品がロクロ成形されていることから、モデルの木製容器もロクロ挽きされたものであった可能性を考え、脚は容器とともに一木から作り出されたものとして、弥生時代の有脚刳物容器（ロクロ仕上げの可能性のあるもの）を想定している。楕円形無脚合子形石製品のモデルについては、曲物容器の可能性に言及しているが、弥生時代から古墳時代の曲物容器の事例が知られていなかったこの段階では、身の器壁のみを曲物とし、蓋と底は別の技術をもってするのは考えられないとし、モデルは刳物容器であったとした。同じく合子形石製品を検討した赤塚次郎氏も、円形のⅠ類と楕円形のⅡ類とに分類し、Ⅰ類の身は4本の脚が付き、Ⅱ類は無脚で底部に鏝状の突起が巡るものとする（赤塚 1999）。Ⅱ類のモデルが曲物容器であることは肯定し、Ⅰ類のモデルについては、竹細工編物製品等も含めて検討すべきとして、Ⅱ類のモデルとは別であったとする。また合子形石製品の分布が奈良盆地から東海に偏在すること、最古型式が東之宮古墳出土円形有脚合子形石製品とみられ、その石材が濃尾平野北部に分布する土岐石の可能性あること等から、合子形石製品が東海地域で生み出されたとした。岡寺良氏は、西谷氏の分類を高く評価し、同様の視点を踏襲しつつ、円形、楕円形の形状と小型、大型の大きさ、碧玉、緑色凝灰岩、滑石の材質、文様の違いから発展的に分類をおこなっている（岡寺 2010）。さらに円形有脚合子形石製品については、脚部の断面形に注目して方形から半円形、そして三角形へと変遷するとしている。小型の円形有脚合子形石製品のモデルについては、無文の刳物脚付き容器を考えている。

木製容器研究から合子形石製品のモデルを検討したものには、上原真人氏の論考があるが、楕円形無脚合子形石製品については、西谷氏が刳物の木製合子をモデルに想定することには否定的で、やはり曲物容器がモデルであるとみている（上原 1994）。一方で円形有脚合子形石製品のモデルについては、滋賀県東近江市雪野山古墳副葬品の木製合子蓋等を介して、黒漆塗り「櫛笥」のような実物の精巧な容器があって、それが石製品に置き換えられたとする。飯塚武司氏も、合子形石製品のうち楕円形のもの、弥生時代に成立した曲物を祖型にしている

ことはほぼ確実とし、円形有脚合子形石製品については、西谷氏と同様に挽物の木製合子であったと考えている（飯塚 2003）。具体のモデルはまだみられないが、古墳時代前期初頭の千葉県茂原市国府関遺跡の挽物合子未成品とみられる蓋と身の存在から、モデルとなる挽物合子が存在した可能性を提示している。そして特に碧玉製円形有脚合子形石製品の祖型は漆器の挽物容器であった可能性を指摘している（飯塚 2017）。

以上にあげた円形有脚合子形石製品のモデルについての言及では、具体的な器物での提示は想定の部分が多いが、精巧な容器がモデルであったとするのは共通する。そのなかで具体的なモデルの一部が樋上氏の検討された脚状木製品であろうと考える。そして、筆者は今回検討している辻土坑 4 例がより直接的な円形有脚合子形石製品のモデルとして重視している。さらにこの木製品の形状だけでなく、後述するように同じ土坑から共伴して古墳副葬の石製品や古墳に樹立される埴輪に写される木製品がセットで出土していることもモデルとしての可能性を高める要素と考える。

## （2）脚状木製品の類例（図 4・5）

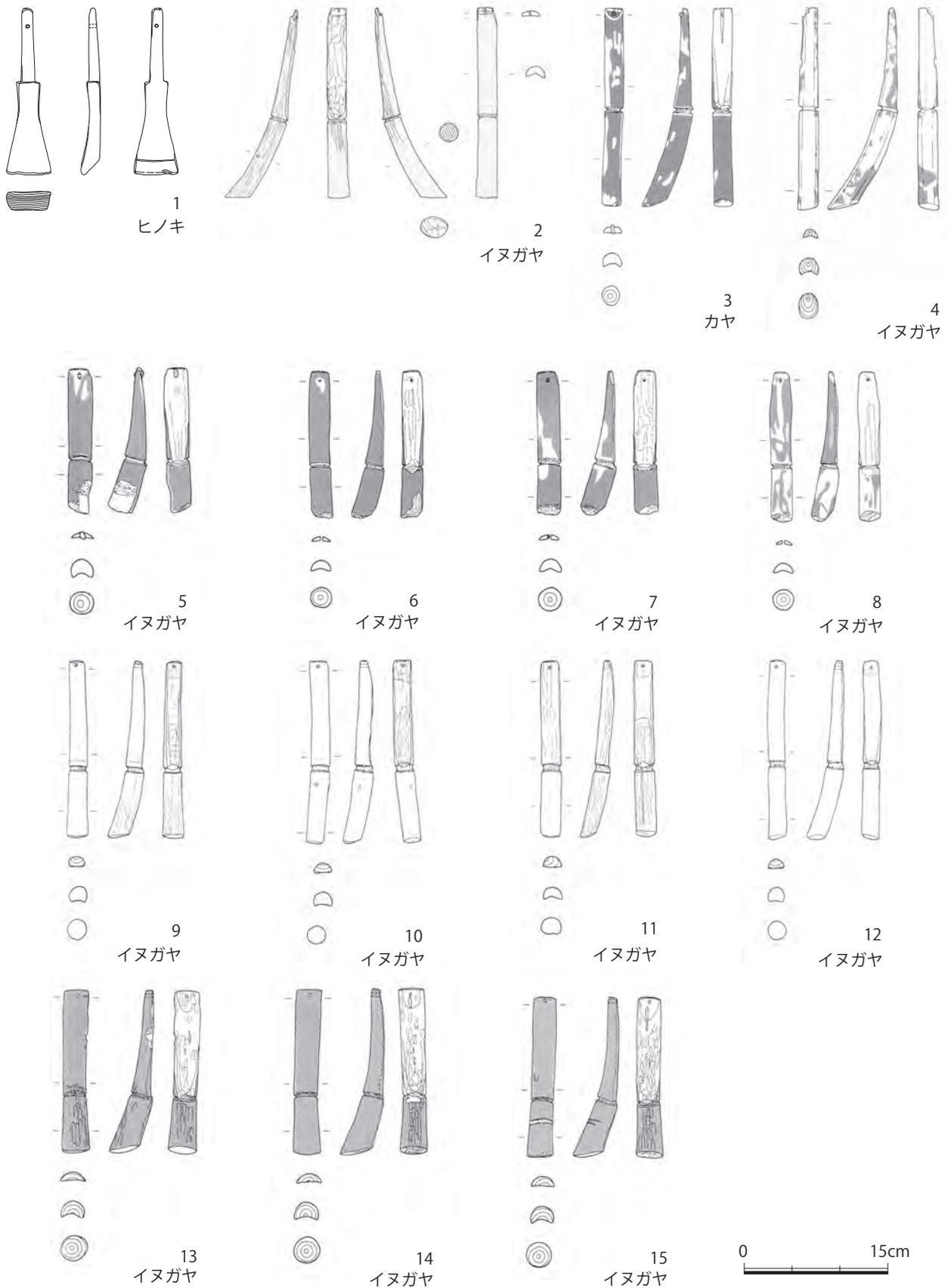
### ①纏向遺跡辻土坑 4 例の類例

辻土坑 4 例の特徴は、軸部が作り出され、別作りの器物と組み合わせるよう内側を平坦な面とし、上端に貫通孔を設けること、脚部外面が反りをもつこと、脚部下端面が斜面を形成すること、軸部と脚部の境の外面・両側面に段を形成することがそれぞれあげられる（図 4-1）。このような特徴をもつ類例は、前述の樋上氏の論考にある脚状木製品が該当するとみられ、「身を受ける割り込みが浅く、下端部が強く外反するタイプ」と「ほとんど反りをもたないタイプ」に分類されたものである。以下、前者を「反りタイプ」、後者を「直立タイプ」として論を進めていきたい。反りタイプの出土例は、青谷上寺地遺跡、白江梯川遺跡、岡山県倉敷市上東遺跡（下澤 2001）、朝日遺跡にみられ、直立タイプは島根県出雲市姫原西遺跡、青谷上寺地遺跡、朝日遺跡、六大 A 遺跡にみられる。このうち後述する共伴する木製品の共通性から、辻土坑 4 例の成り立ちに大きな影響を与えたとみられる青谷上寺地遺跡例と白江梯川遺跡例と姫原西遺跡例を検討してみたい。

### ②青谷上寺地遺跡出土例

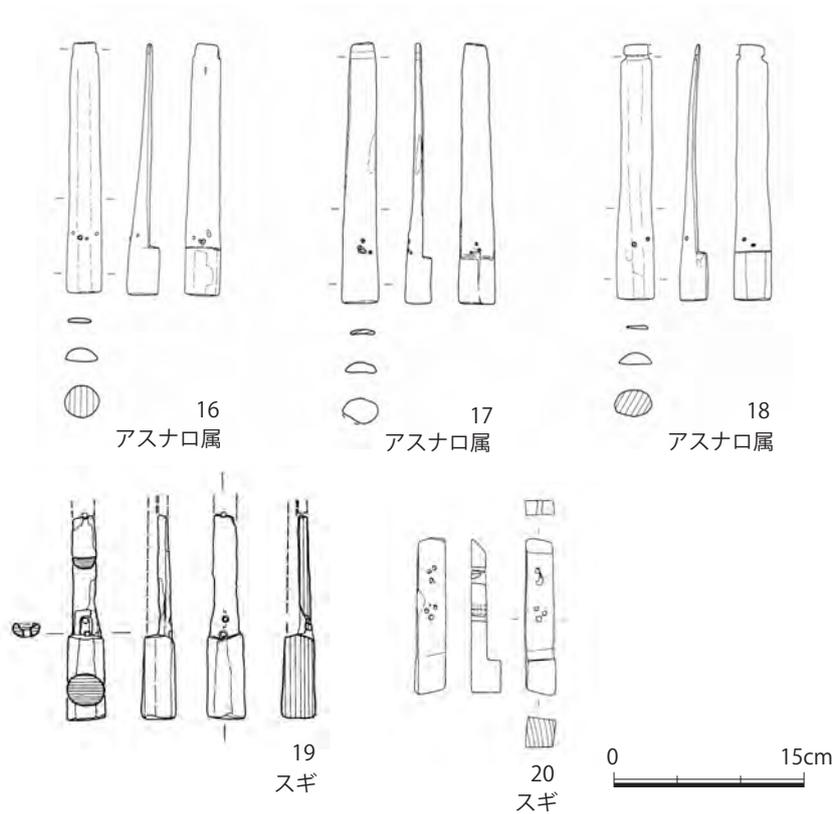
報告書によると脚状木製品を容器脚としており、18 点の出土<sup>(4)</sup>が確認できる（野田・茶屋 2005）。反りタイプと直立タイプのがみられる。時期的には直立タイプは弥生時代中期後葉、反りタイプは弥生時代後期～古墳時代前期初頭を主体とするものである。反りタイプ（図 4-3～15）は中位もしくはやや下位に幅 0.4～0.45cm の輪状の溝を設け、溝から上位は内側にあたる面を成形するにあたって樹芯を削り抜いて斜めにカットしている。断面でみると凹面状となる。カット面が容器等に固定された面になる。また上端には固定のための貫通孔が穿たれており、固定用の樹皮紐ないし木釘が残存するものもある。脚部の下端も斜めにカットされ、下端面が斜面になるように整形するものがほとんどである。反りタイプ 15 点のうち、固定される内面と溝、下端面以外全面的に赤彩されるものが 10 点ある（図 4-3～8・13～15）。輪状の溝が下位側に設けられるものと中位に設けられるものが存在し、前者は 11 点ある（図 4-5～15）。前者のなかには 4 本セットで出土したものが 2 組あり、長さ 14.8～15.5cm で幅が 2.1～2.4cm の 4 本セット 1 組（図 4-5～8）と、長さ 18.4～19.2cm で幅が 1.8～2.2cm の 4 本セットが 1 組（図 4-9～12）である。3 本セットで出土したものは、長さ 16.9～17.4cm で幅 2.8cm のものが 1 組（図 4-13～15）である。セットになった脚状木製品は大きさをほぼ揃えていることから、一つの容器に結合されたのは確実で、本来の脚数が復元できる。反りタイプのなかで中位に溝が施されるものは 2 点あり、セットでの出土ではないが、長さ 20.7～21.1cm・幅 2.2cm で、脚部下端面を他例よりもやや傾斜が強くやや丸みを帯びるような斜面に仕上げているのが特徴である（図 4-3・4）。ほぼ同形同大で、ほかに比べてやや長く造形されている。そのうち 1 点は軸部外面上端が半円形で斜めに面取りされ、そこに貫通孔が設けられるという特徴をもつ（図 4-3）。これら反りタイプの樹種は 1 点だけカヤである以外、すべてイヌガヤである。木取りはイヌガヤの特徴を利用して滑らかな反りをもつ枝材等を用材にしたとみられ、芯持ち材がほとんどである。

直立タイプは 3 本セットで出土しており（図 5-16～18）、それぞれほぼ同形同大と言っている形状である。



1. 纏向遺跡 2. 白江梯川遺跡 3~15. 青谷上寺地遺跡

図4 纏向遺跡辻土坑4出土脚状木製品の類例①(S=1/6、反りタイプ、アミは赤彩部分)



16～18. 青谷上寺地遺跡 19. 姫原西遺跡 20. 白江梯川遺跡

図5 纏向遺跡辻土坑4出土脚状木製品の類例②(S=1/6、直立タイプ)

円形の棒材の約4/5を半裁し、その下端をL字にカットし、その面を容器との固定面としたとみられる。カット面上端に横位の溝、下端に穿孔を設けて容器と緊縛したとみられる。長さは20.0～20.6cm、脚部径2.7～3.0cmである。樹種はアスナロ属、木取りは芯去り材であり、反りタイプとは用材・木取りが異なる。前述のように六大A遺跡から出土した直立タイプの脚状木製品(穂積2000)から、曲物脚の可能性が考えられる。

### ③白江梯川遺跡出土例

出土している脚状木製品は反りタイプ1点と直立タイプ1点である(久田2024)。いずれも弥生時代後期の所産とされる。

反りタイプの形状(図4-2)は、青谷上寺地遺跡例の中位に輪状の溝をもつ例(図4-3)と酷似する。長さは21.1cm、脚部径は2.0cmで大きさもほぼ同じである。同工品と言っても過言ではないものである。軸部の内側にあたる面において樹芯を削り抜いて斜めにカットすることで作り出し、断面で見ると凹面状になるのも同様である。特に軸部外面上端が半円形で斜めに面取りされ、

そこに貫通孔が設けられるというのは青谷上寺地遺跡例では図4-3のみにみられる造形で、その部分での共通性は同じ工人の作品の可能性が指摘できる点である。脚部下端面をやや傾斜が強くやや丸みを帯びるように仕上げた斜面にしているのも同様である。表面への赤彩の施され方も青谷上寺地遺跡例と同様である。樹種はイヌガヤで、木取りは芯持ち材である。報告書で指摘されているように青谷上寺地遺跡からの搬入品である可能性も十分に考えることができる(久田2024)。

直立タイプの形状(図5-20)は、断面が方形の角材の上端から約4/5を半裁し、その下端をL字にカットし、その面を容器との固定面としたものとみられる。また軸部となるカット面上端は斜めに切り落とされ斜面を形成し、カット面のやや上位とやや下位の2ヶ所に三つずつ貫通孔が穿たれている。長さは12.4cm、脚部幅は2.4cmである。木取りは芯去り(柁目)材で、樹種はスギである。青谷上寺地遺跡の直立タイプと比較すると、断面形や軸部上端の形状、貫通孔の施され方、用材等で異なるが、木取りでの共通性がみられる。報告書で

は青谷上寺地遺跡例をモデルにしつつ、白江梯川遺跡独自で製作したものである可能性を指摘している（久田2024）。

#### ④姫原西遺跡出土例

出土している脚状木製品は直立タイプの1点のみである（図5-19）。弥生時代後期の所産とされる（足立1999）。形状は、断面円形の棒材を上端から半裁し、その下端をL字にカットして、その部分までが軸部となり、以下の断面円形部分が脚部となる。軸部のカット面が容器との固定面になったものとみられる。軸部の上端は欠失している。軸部の上位中央に一つの貫通孔、下端中央に上下に二つの貫通孔を設けている。軸部の横断面はわずかに凹面を形成するよう仕上げられており、青谷上寺地遺跡例の反りタイプと共通する。脚部は断面円形で、長さ6.7cm、直径2.8cmを測る。下端面は平坦に仕上げられている。残存長は16.0cmであり、本来は青谷上寺地遺跡例の直立タイプに近い大きさであった可能性があるが、脚部は本例のほうが発達している。木取りは芯去り（柃目）材で、樹種はスギである。本例では軸部・脚部の横断面形状や木取りで青谷上寺地遺跡例の反りタイプと直立タイプの両方の要素をみることができる。またスギを用材としており、白江梯川遺跡例の直立タイプと共通する。

### IV. 纏向遺跡辻土坑4出土脚状木製品の系譜と性格

#### （1）纏向遺跡辻土坑4例の系譜

纏向遺跡辻土坑4例は、反りタイプとした青谷上寺地遺跡例を典型例として、山陰で成立したとみられる精巧な造形の脚状木製品に系譜をもつのではないかと考え、各事例をみてきた。系譜の蓋然性を示すため改めて形状の比較検討をおこないたい。

前述のように青谷上寺地遺跡からは多数の脚状木製品が出土しており、特に反りタイプは出土点数の多さとともに、3本ないし4本のセットで用いられていたことが出土状況と形状を揃えていることから確実である。出土例のある他遺跡では、単体で出土しており、その希少性がうかがわれるとともに、この木製品の成立地が青谷上寺地遺跡にあった可能性を指摘することができる。青谷上寺地遺跡を発信元とする精巧な木製品としては、筆者

がかつて検討した精製（青谷型）剝物腰掛<sup>(5)</sup>（鈴木裕明2021）や、花卉の装飾が浮き彫りされた木製装飾（花卉）高杯<sup>(6)</sup>等、弥生時代後期を代表する木製品が存在しており、脚状木製品も同様の性格をもつものと位置付けられる。

青谷上寺地遺跡例の反りタイプの特徴をあげると、中位付近に輪状の溝を設けること、溝から上位の軸部は、樹芯を削り抜く形で斜めにカットし、その面が容器等に固定された内面とすることである。また上端には固定のための貫通孔が穿たれる。脚部の下端も斜めにカットされ、斜面の下端面を形成する。外面は赤彩されており、この木製品の特殊性を示す。断面円形を指向し、イヌガヤを主体とする芯持ち材である。これが典型的な形状となる。このなかで図4-2の事例とほぼ同形同大で同じ要素を備えたものが図4-3の白江梯川遺跡例である。出土点数等をみても山陰の青谷上寺地遺跡で成立したものが、北陸の白江梯川遺跡に伝播した可能性が高い。

この両遺跡から出土している脚状木製品をモデルとして辻土坑4例が成立したのではないかと考える。まず中位の輪状の溝は、辻土坑4例では脚部の上端に軸部の三方を取り巻く平坦な面を形成する段として引き継がれる。また、軸部内面を凹面状カットして容器身との結合するための造形も、辻土坑4例が軸部内面を平坦にすることで踏襲している。軸部の上端に貫通孔を設けることも共通する。そして最も特徴的である脚部の反りも、辻土坑4例が脚部外面側を凹面状に造形することでその形状を引き継いでいる。さらには脚部下端面を斜めにカットして斜面を形成する部分も共通している。以上のことから、青谷上寺地遺跡例反りタイプの特徴的な造形が辻土坑4例に引き継がれていることがわかる。

一方で青谷上寺地遺跡例、白江梯川遺跡例が断面円形を指向し、イヌガヤ・カヤを用材とする芯持ち材である点や外面を赤彩するという点は辻土坑4例と異なるところである。辻土坑4例は、断面方形ないし台形をしており、ヒノキを用材とする芯去り（板目）材で、脚部が裾広がりの撥形を呈するところは特徴的な相違点である。現状では辻土坑4例の形状の脚状木製品はこの一例のみであることから、青谷上寺地遺跡例と白江梯川遺跡例の反りタイプの特徴を強く残しつつ、奈良盆地東南部の地で古墳時代前期初頭から木製威儀具をはじめとして様々

な木製品の用材とされるヒノキを用いて、脚状木製品が製作され、断面形状や脚部の平面形状に独自の造形をおこなった可能性が考えられる。この造形や用材の変換は奈良盆地東南部でおこなわれたと考えられるが、影響を与えたものとして、青谷上寺地遺跡例、白江梯川遺跡例、姫原西遺跡例にみられる直立タイプの可能性も考えられる。青谷上寺地遺跡例はヒノキ科アスナロ属を用材とし、芯去り材の木取り、白江梯川遺跡と姫原西遺跡例はスギを用材として、芯去り材の木取り、特に白江梯川遺跡例は軸部・脚部ともに断面方形を指向するという点が注目される。また、反りタイプにみられるような外面を赤彩して装飾するというものが無く白木のままの仕上げである。辻土坑4例の成立にあたっては、主たる要素は反りタイプのものを引き継ぎつつ、用材の変換や木取り、断面形状、白木での仕上げ等においては直立タイプの要素も取り入れた可能性を考えたい。

反りタイプについては、青谷上寺地遺跡例は弥生時代後期～古墳時代前期初頭の可能性のある河道や溝から出土しており、厳密に時期を絞り込むことは難しいが、弥生時代後期を主体としていることは間違い無く、古墳時代前期初頭（纏向3式）の辻土坑4例に先行するものであることは確実である。白江梯川遺跡例も前述のように分布の中心の青谷上寺地遺跡で製作されたものが搬入された可能性が考えられることから、青谷上寺地遺跡から白江梯川遺跡へという系譜とみて問題ないであろう。直立タイプのものは、青谷上寺地遺跡例が弥生時代中期後葉の遺物包含層から出土しており（湯村2002）、時期的に反りタイプに先行する可能性がある。白江梯川遺跡例と姫原西遺跡例の直立タイプは、同じく弥生時代後期の河道から出土したものである。直立タイプが反りタイプよりも先行して成立している可能性があるが、両者が弥生時代後期において併存していたのは確かで、両者が出土している朝日遺跡例や直立タイプのみみられる六大A遺跡例のように点的ではあるが、脚状木製品が東海地方まで分布している。ただ反りタイプを主体としながらも、直立タイプの要素をも取り入れ、さらに古墳時代前期的な左右対称と曲線を意識した造形のヒノキ製の脚状木製品の製作を達成したのは、辻土坑4例と考える。まさにこの形状が円形有脚合子形石製品の脚として写されたのではないかと推測している。

## （2）脚状木製品の共伴木製品

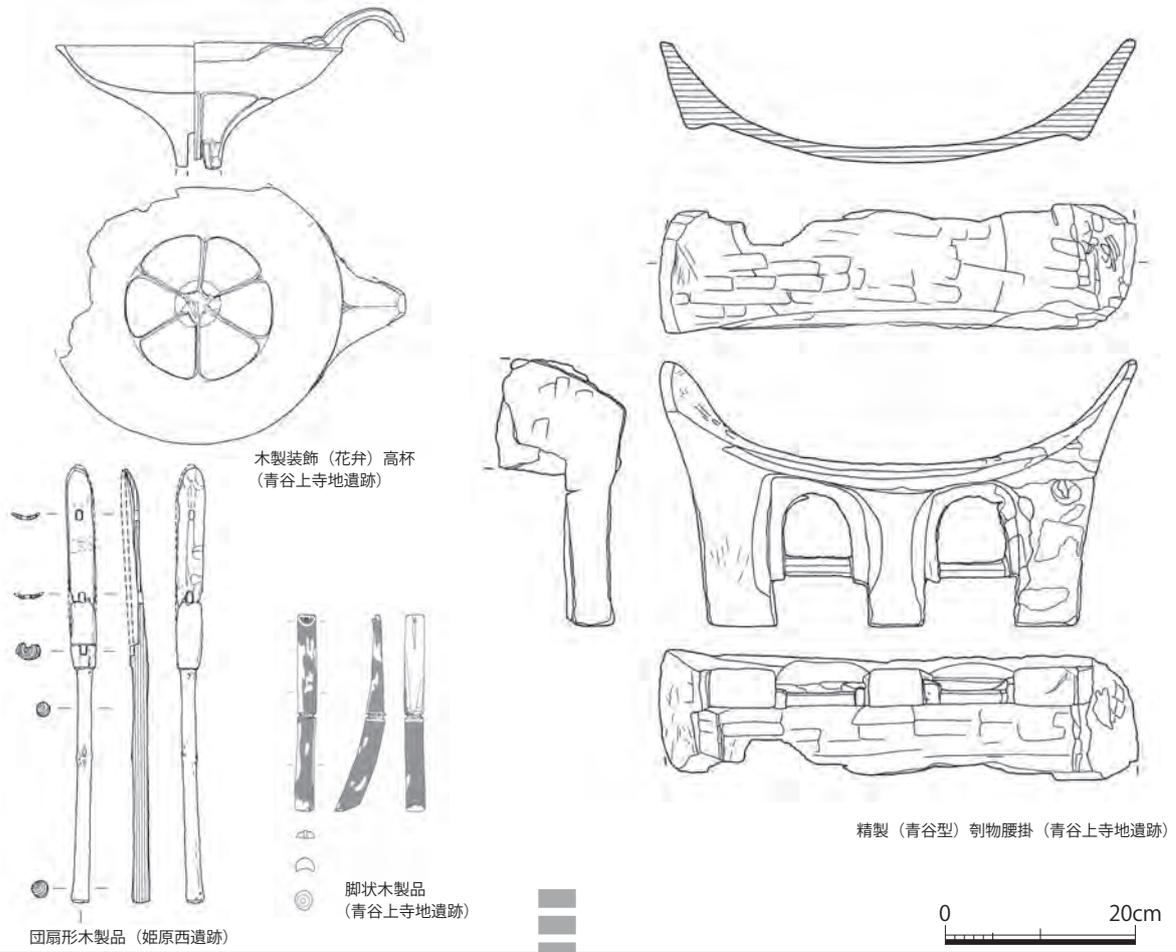
脚状木製品の性格や使用場面を明らかにするために、辻土坑4例に共伴する特殊な木製品群のような事例をもつ青谷上寺地遺跡例、白江梯川遺跡例、姫原西遺跡例の共伴木製品を検討し、脚状木製品が特殊な木製品群の一つであることを確認した上で、これらの奈良盆地東南部への受容過程と展開について考えてみたい。

### ①纏向遺跡辻土坑4例と共通する共伴木製品

－青谷上寺地遺跡例、白江梯川遺跡例、姫原西遺跡例－（図6）

前述のように辻土坑4例に共伴して木製装飾（透彫）高杯<sup>(7)</sup>、団扇形木製品、精製刳物腰掛が出土している（図2下段）。辻土坑4の木製装飾（透彫）高杯は、以下でふれる青谷上寺地遺跡の木製装飾（花卉）高杯の系譜をひくもので、杯部と脚部が組み合わせの可能性はあるが、出土しているのは杯部片である（図6下段左上）。透かし孔を設け、黒漆と赤彩で外面が装飾され、非常に精巧な木製品となっている。この木製装飾（透彫）高杯は埴輪化して古墳時代前期前半～中頃の奈良県桜井市メスリ山古墳の高杯形埴輪に写され、石製品化して古墳時代前期後半の奈良県奈良市佐紀陵山古墳に副葬された高杯形石製品となる（飯塚2003）。団扇形木製品は、柄の下半のみが残存している（図2下段中央下）。その特徴的な鍔部の形状から勝山古墳からほぼ完形品が出土している纏向型団扇形木製品<sup>(8)</sup>（図6下段左）の柄であることがわかる。ヒノキの一木から二枚板の要部と受部、握部、鍔部を作り出した精巧な木製品で、筆者は、この木製品が後漢～魏晋南北朝期の中国の古墳壁画等に描かれ、実物は正倉院宝物や法隆寺献納宝物にみられる塵尾であろうと考えている（鈴木裕明2001）。二枚板構造の要部は、奈良県天理市乙木・佐保庄遺跡の翳形木製品（図6下段中央）に引き継がれ、この部分の造形と、辻土坑4例と勝山古墳例にみられる纏向型団扇形木製品の特徴的な鍔部の造形が石に写され、古墳に副葬されたものが古墳時代前期前半の奈良県桜井市桜井茶臼山古墳にみられる玉杖と玉葉の組み合わせである（清喜2005、鈴木裕明2005b、井上2025）。纏向遺跡辻土坑4出土の精製刳物腰掛（図2下段中央上）は、脚部が外側に踏ん張る形のもので、針葉樹のなかでは最も貴重なコウヤマキを用材とするものである。精製刳物腰掛は、木製装飾高杯

弥生時代後期～古墳時代前期初頭の山陰の特殊な木製品群



古墳時代前期初頭～前半の奈良盆地東南部の特殊な木製品群

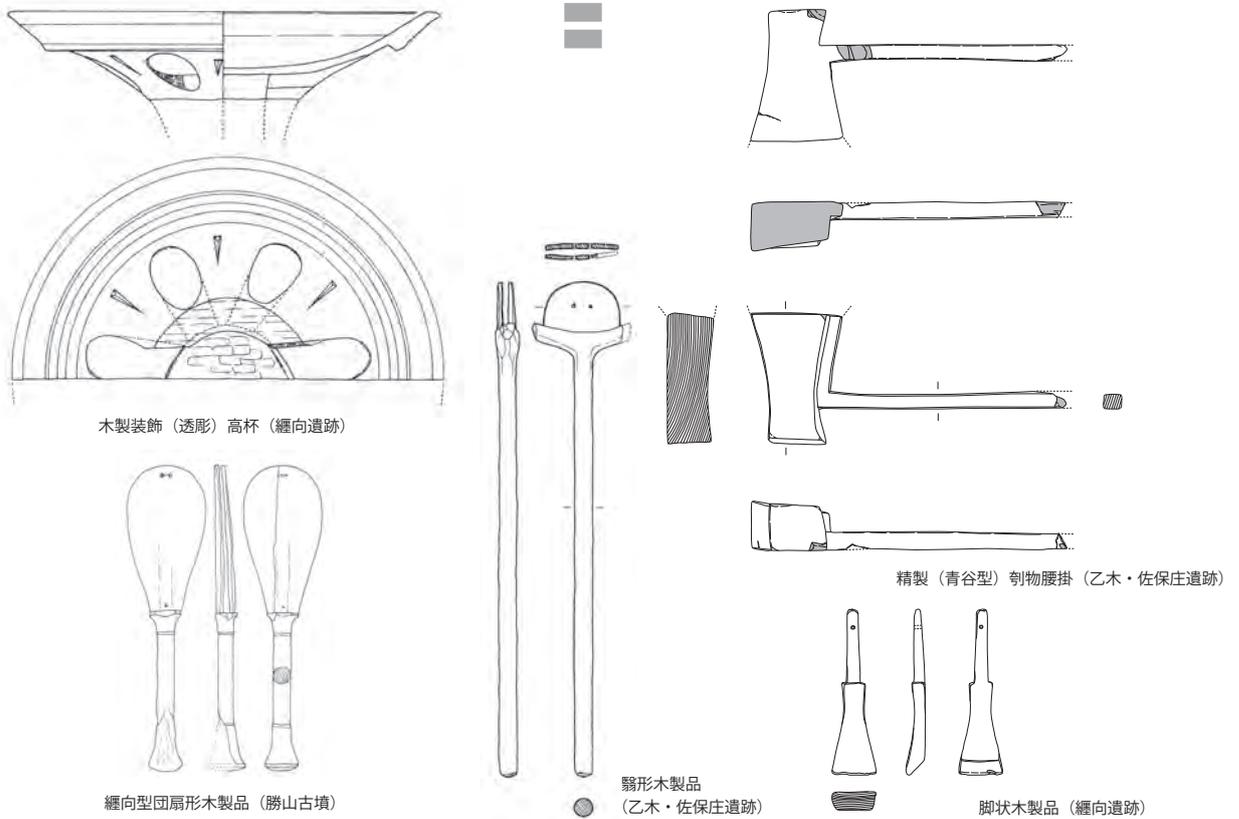


図6 特殊な木製品群の変遷概念図 (S=1/8)

と同様、石に写されてメスリ山古墳や佐紀陵山古墳に腰掛形石製品として副葬され、古墳時代中期以降には埴輪化され、数は多くないが腰掛形埴輪あるいは倚坐人物埴輪の腰掛部分に形象される（鈴木裕明 2021）。

このように辻土坑4出土の特殊な木製品群は、古墳時代前期の最大クラスの前方後円墳の埴輪や副葬された石製品として形象されており、自ずとその器物のもつ特殊性を指摘することができる。すなわち辻土坑4でおこなわれた祭儀にあたって、主宰した人物が大型前方後円墳に葬られる首長で、その人物が使用した道具であった可能性が考えられる。今回検討している脚状木製品が古墳に副葬される円形有脚合子形石製品のモデルであるとする蓋然性もここに見出すことができる。

これらの特殊な木製品群が、辻土坑4例に先行して、山陰や北陸にみられ、青谷上寺地遺跡、白江梯川遺跡、姫原西遺跡では共伴関係にあることが重要である（図6上段）。青谷上寺地遺跡では、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の溝等から、脚状木製品とともに多数の木製装飾（花卉）高杯（野田・茶屋 2005）や当遺跡で典型例が成立したとみられる精製（青谷型）刳物腰掛（鈴木裕明 2021）が複数出土している。団扇形木製品はこれまでの調査では出土していない。木製装飾（花卉）高杯は組み合わせ式で、別作りの脚部と組み合う形となるもので、杯部外面には4～6弁の花弁文様を彫刻施文し、椀状の杯部に飾り耳と呼ばれる突起部が付く（図6上段左上）。脚部は柱状部に杯部花弁文様から続く縦方向に細く貫通する溝が均等に配され、さらに裾広がり脚台部にはその溝間を均等に分割する形で、倍の溝が施される。主にヤマグワを用材としている。精製（青谷型）刳物腰掛は、一木から座板と脚部が作り出されたもので、座板は尻受けとして大きく反り、座板端面は上方を向いて形成される（図6上段右）。側面からみると座板端部はアーチ状になっており、脚は本来、座板下面長辺に沿って6本作り出されていたとみられる。脚間をアーチ状に仕上げ、棧木状の横木で各脚をつなぐ形に作り出しており、横木から連続して脚側辺に沿った一段低い張り出しも設けられている。脚は正面からみると逆台形状になるのが特徴である。この形状の到達点にあるとみられるものである。木取りは横木取りでスギやトチノキを用材としている。このほかに青谷上寺地遺跡では、山陰と北

陸を中心に分布する精巧な刳物桶、黒漆塗布後赤彩で文様を描いた装飾豊かな木製蓋・脚台付壺、裾広がり脚台に木製蓋・脚台付壺と同様の彩色と透孔が施される曲物底板、精巧な刳物脚付槽、木鏃、盾、舟形・鳥形・剣形・刀形・人形木製品等の祭祀具がそれぞれ出土している（北浦 2001、湯村 2002）。祭儀で使用された精巧な木製品を多数確認できるとともに、この種の木製品の範型となるような弥生時代工芸の頂点がここにあったと言っても過言ではない。

白江梯川遺跡では、弥生時代後期の河道から脚状木製品が出土しており、同じ遺構から木製装飾（花卉）高杯と精製（青谷型）刳物腰掛が出土している（久田 2024）。団扇形木製品は出土していない。白江梯川遺跡出土の木製装飾（花卉）高杯は、青谷上寺地遺跡にみられる木製装飾（花卉）高杯に酷似し、飾り耳部分は欠失するが、杯部外面に6つの花弁文を彫刻したもので、内外面には朱の痕跡が確認できる装飾豊かなものである。クワ属を横木取りして製作されている。精製（青谷型）刳物腰掛は、青谷上寺地遺跡の6脚が作り出された典型例とよく似ている。トチノキを横木取りし製作されている。このほかに白江梯川遺跡では、青谷型の脚部をもつ刳物脚付槽や青谷上寺地遺跡例との共通性の強い刳物桶、短剣柄、盾、剣形・ヤリ形・鳥形等の祭祀具が出土しており、祭儀において使用されたとみられる精巧な木製品が多数確認できる。

直立タイプの脚状木製品が出土している姫原西遺跡では、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の河道から大量の木製品が出土しており、このなかに青谷上寺地遺跡例、白江梯川遺跡例と共通する木製装飾（花卉）高杯がある（足立 1999）。また精製（青谷型）刳物腰掛が2点出土しており、いずれも青谷型の特徴をよく備えたもので、6脚が作り出された形に脚部が復元できるものである。1点はヒノキ科クロベ属を横木取りしたもので、もう1点は樹種不明（広葉樹か）であるが横木取りされたものである。さらに団扇形木製品も出土しており、纏向遺跡辻土坑4例と同様のセット関係を備えている。団扇形木製品は、モミ属の芯持ち材の一木から柄と要の片側一枚が作り出され、要のもう一枚は別作りとなっている<sup>(9)</sup>（図6上段左下）。要板が舟形に細長く作り出され、柄がやや長めに作られているのが特徴である。前述の古墳時代

前期初頭～前半の纏向型団扇形木製品より前段階のものと位置付けられる(鈴木裕明 2001)。姫原西遺跡でも同じ遺構から青谷型の脚部をもつ刳物脚付槽や他に例をみない弩形木製品、前述の山陰と北陸に分布する精巧な刳物桶、刳物脚付円形盤、三稜鏃を模した木鏃、盾、琴板、履物、舟形木製品や戈形木製品等の祭祀具が出土しており、白江梯川遺跡と同様祭儀に使用されたとみられる精巧な木製品が多数確認できる。

以上、この3遺跡においては、纏向遺跡辻土坑4例の脚状木製品の先行例があり、共伴して木製装飾(花卉)高杯、精製(青谷型)刳物腰掛があり、さらに姫原西遺跡では団扇形木製品があることが改めて確認できた。これらの遺跡間での前後関係もあるとみられるが、木製装飾(花卉)高杯と精製(青谷型)刳物腰掛については、典型例が青谷上寺地遺跡で整えられたとみられる。ここまで検討してきた脚状木製品の成立地が青谷上寺地遺跡とみられこととも整合性がある。このセット関係が、弥生時代後期の山陰～北陸におけるトップクラスの首長の威信財のあり方を示しているであろう。

#### ②纏向遺跡辻土坑4出土特殊な木製品群の成立過程と展開(図7)

辻土坑4例で達成される特殊な木製品群のセット関係のルーツは、山陰・北陸、特に山陰に求められることが確認できた。また、脚状木製品もこのセット関係に含まれるものとみて間違いない。ここまで検討してきた3遺跡から出土している脚状木製品及び特殊な木製品群の奈良盆地東南部への受容、その後の展開を検討するために、脚状木製品以外でもこの特殊な木製品群を複数もつ遺跡も含めて考えてみたい。

弥生時代後期の脚状木製品の分布は、山陽や東海にもみることができるが、前述のように特殊な木製品群とセット関係でとらえるという立場からは、山陰から奈良盆地東南部へというルートを考えるのが、現状では最も可能性が高いとみられる。それは、すでに明らかにされている特殊な木製品群の木製装飾高杯(樋上 2016、石川 2019)、団扇形木製品(鈴木裕明 2003)、精製(青谷型)刳物腰掛(鈴木裕明 2021)の弥生時代後期～古墳時代前期前半の分布にかなり近い状況から裏付けられる(図7)。改めてこれらの特殊な木製品群の分布状況を検討すると、まず山陰では、前述の姫原西遺跡におい

て、木製装飾(花卉)高杯、団扇形木製品、精製(青谷型)刳物腰掛、脚状木製品のセット関係がある。青谷上寺地遺跡は木製装飾(花卉)高杯、精製(青谷型)刳物腰掛、脚状木製品の創出とセット関係の成立地である可能性が高く、さらに青谷上寺地遺跡の東側に近在する鳥取県鳥取市松原田中遺跡では、木製装飾(花卉)高杯、団扇形木製品、精製(青谷型)刳物腰掛が共伴して出土している(牧本ほか 2018)。北陸では、白江梯川遺跡の木製装飾(花卉)高杯、精製(青谷型)刳物腰掛、脚状木製品の共伴がある。さらに石川県小松市千代・能美遺跡に纏向遺跡辻土坑4例に酷似する木製装飾(透彫)高杯があり、弧帯文が施された装飾木製品が共伴する(林 2012)。近在する千代デジロ遺跡からは団扇形木製品が出土している(北野 1992)。琵琶湖東岸・南岸(以下、湖東・湖南と表記)では脚状木製品の出土は確認できないが、他の特殊な木製品群が出土している遺跡が古墳時代前期初頭～前半にかけてみられる。湖東から湖南の順に滋賀県内の事例をみていくと、まず米原市入江内湖遺跡では、木製装飾(透彫)高杯と団扇形木製品、刳物腰掛の共伴がある(中井 1988)。さらに弧文円板や脚付浅鉢とされる木製品も出土している。東近江市斗西遺跡では、団扇形木製品と青谷型脚の刳物脚付槽が共伴する(植田 1993)。守山市下長遺跡では纏向型団扇形木製品と共伴して刳物腰掛があり、長柄の上端に杖頭飾りとして弧帯文が円板状で角状突起をもつ形に左右対称で表現された儀杖形木製品も出土している(岩崎 2001)。草津市柳遺跡においては、木製装飾(透彫)高杯と纏向型団扇形木製品が共伴して出土している(平井 2008)。そして奈良盆地東南部では辻土坑4の事例があり、さらに同じく纏向遺跡巻野内家ツラ地区の導水施設周辺の下層の溝から纏向型団扇形木製品と弧文板が出土している(荻原 1987、橋本 1997)。乙木・佐保庄遺跡においては、纏向型団扇形木製品の発展形で桜井茶白山古墳から出土した玉杖形石製品の直接的なモデルとなった翳形木製品と精製(青谷型)刳物腰掛の共伴がある(鈴木裕明 2021)。奈良盆地東南部では纏向遺跡のなかでの展開があり、さらに大和古墳群の造営に連動するとみられる乙木・佐保庄遺跡の形成のなかで、このような特殊な木製品群が引き継がれていることがわかる。

以上のように、脚状木製品とともに木製装飾高杯と団



図7 特殊な木製品群出土遺跡の分布

扇形木製品、精製刳物腰掛は、極めて近い関係で、弥生時代後期～古墳時代前期前半の首長がおこなう祭儀のアイテムにおいて、中心的な役割を担ったと考えられる。辻土坑4例にみられる特殊な木製品群の成立と展開を考えると、すべての要素を含んでいる事例の初現は、山陰の姫原西遺跡例ということになるが、青谷上寺地遺跡にみられる卓越した造形の木製装飾 (花卉) 高杯と精製 (青谷型) 刳物腰掛はここで完成したとみられる。ほぼ同時期には北陸にも伝わり、古墳時代前期初頭には奈良盆地東南部に受容され、纏向遺跡での祭儀アイテムとして整えられたと考えられる<sup>(10)</sup>。そして奈良盆地東南部のなかでの展開とともに、主に古墳時代前期前半のなかで特殊な木製品群として湖南・湖東、北陸へ伝わり (図7)、団扇形木製品では東日本への展開がある (鈴木裕明 2003)。さらに奈良盆地東南部からの展開にあたっては、直接的に器形が埴輪・石製品に写されるわけではないが、古墳時代を通じて古墳出土品や集落遺跡出土の首長関連遺物に写される直弧文の祖型となる弧帯文が施さ

れた木製品が共伴する場合が多い<sup>(11)</sup>。

反りタイプで装飾性豊かな脚状木製品と木製装飾 (花卉) 高杯、精製 (青谷型) 刳物腰掛は、弥生時代後期のなかで青谷上寺地遺跡において完成形となる精美な造形を達成するが、古墳時代前期初頭～前半の奈良盆地東南部での受容にあたっては、木製装飾 (花卉) 高杯は纏向遺跡辻土坑4例のような木製装飾 (透彫) 高杯に、団扇形木製品は纏向遺跡に分布の中心がある纏向型団扇形木製品と乙木・佐保庄遺跡の事例が唯一の翳形木製品に、精製 (青谷型) 刳物腰掛は乙木・佐保庄遺跡のような四脚に復元できる精製 (青谷型) 刳物腰掛にそれぞれ形状が整えられ、王権中枢でおこなわれた祭儀で使用され、その形状が埴輪や古墳副葬の石製品に写されたと考えられる (図6)。そこに弧帯文が施された木製品も加わった可能性が考えられる。そして今回検討している辻土坑4例も青谷上寺地遺跡例のような反りタイプを纏向遺跡において断面方形で左右対称な反りタイプの形状に整え、それが円形有脚合子形石製品の脚部のモデルになっ

たとえたい。

特殊な木製品群は、纏向遺跡における祭儀のアイテムとして完成をみた位置付けられるが、それは弥生時代以来の土坑祭祀に、山陰系譜の特殊な木製品群が首長祭儀のアイテムとして加わった形であった。山陰・北陸では、これらの木製品は溝・河道の流路から出土しており、土坑から出土したという事例は確認できない。奈良盆地東南部への受容にあたっては、弥生時代以来の既存の祭儀の場に王権中枢での祭儀にふさわしいアイテムがまず導入されたのであろう。その後、纏向遺跡巻野内家ツラ地区の溝および乙木・佐保庄遺跡の河道出土の特殊な木製品群をみると、これらのアイテムを使用した祭儀の場も山陰・北陸のあり方を導入した可能性が指摘できる<sup>(12)</sup>。

## V. まとめにかえて

### —脚状木製品と合子形石製品—

纏向遺跡辻土坑4出土の脚状木製品を検討することで、その由来が弥生時代後期～古墳時代前期初頭の山陰、特に青谷上寺地遺跡に求められ、さらに同遺跡からは木製装飾（花卉）高杯、精製（青谷型）刳物腰掛が、そして姫原西遺跡にみられる団扇形木製品が加わって、特殊な木製品群がセットで、山陰から奈良盆地東南部までもたらされた可能性を指摘した。その上で古墳時代前期初頭～前半の奈良盆地東南部において、脚状木製品が木製装飾（透彫）高杯、纏向型団扇形木製品、精製（青谷型）刳物腰掛とともに首長祭儀の重要なアイテムの一つとなっていたことを確認した。

脚状木製品の形態としては、青谷上寺地遺跡例を典型例とする反りタイプの特徴を強く残しつつ、纏向遺跡において古墳時代前期的な左右対称と曲線を意識した造形で、断面形状が方形を指向したものが成立したと考えた。用材もイヌガヤを主体とする芯持ち材から、古墳時代前期初頭～前半の木製威儀具をはじめとして様々な木製品の用材とされるヒノキの芯去り材で良質な部分を用いるという材と木取りの変換がおこなわれている。同じ状況は、精製（青谷型）刳物腰掛や団扇形木製品にも認められるところである。

辻土坑4例のように奈良盆地東南部で形状が整えられた脚状木製品は、その希少性からか、現状確認できるの

はこの1例のみである。ただこの形状は前述のように、円形有脚合子形石製品の脚部のモデルとなった可能性が高い（図8）。円形有脚合子形石製品は、身の底面外周に4本の脚が作り出されたもので、前述の赤塚分類のI a類にあたり、さらに硬質で良質な碧玉製の小型品をI a類、装飾性が高く緑色凝灰岩製の中型品をI b類としている（赤塚1999）。このタイプのもは奈良盆地で最も多くの出土があり、分布の中心となっている。I a類は富雄丸山古墳から1点（八賀1982、図8上段左）、島の山古墳から3点（西藤2019、図8上段右）、蓋のみであるがメスリ山古墳から1点（伊達1977）出土している。I b類はマエ塚古墳から2点（小島1969、図8下段左）、佐味田宝塚古墳から1点（河上2002、図8下段右）、蓋のみが佐紀陵山古墳から1点（徳田1992）、赤土山古墳から1点（松本2004）、それぞれ出土している。前期中葉～後半の最大級の前方後円墳を含む奈良盆地の主要な古墳から出土していることがわかる。

これらの脚部の造形に注目すると、いずれも外側に踏ん張る形状をしており、側面からみると湾曲して外反する形状となっている。正面観は方形もしくは台形状である。下端面は平坦な接地面となり、下端外面は端部の稜を面取りしたような形の面が形成されている。これらの特徴はまさに辻土坑4例が備えている要素で、底面となる斜面状の面を接地面とすると、脚部が外側に踏ん張る形となり、側面からみて湾曲して外反する形状、石製品ではデフォルメされた形ではあるが撥形の正面形、面取りされた下端面がそれぞれ石製品に写されているとみなせる。脚状木製品が踏ん張る形で、軸部が容器の身に結合されたとすると、その身は内傾する形状になる可能性が高い。奈良盆地の合子形石製品I a・I b類はいずれも身の形状が内傾する形となっており、想定する木製容器身の形状とも整合的である。また、島の山古墳例、マエ塚古墳例、佐味田宝塚古墳例では、脚部から連続して身の下端に同じ幅の縦方向の装飾がある。また、その部分の脚部と身下端の境には横位に稜または凹線が形成されており、これが辻土坑4例の軸部と脚部の境の段差を表現している可能性がある。これらの部分が木製品の身と脚状木製品軸部の結合部分の器官痕跡とみなすこともできる。この辻土坑4例が合子形石製品I a・I b類脚部のモデルとなった可能性は、これら各要素の共通性が

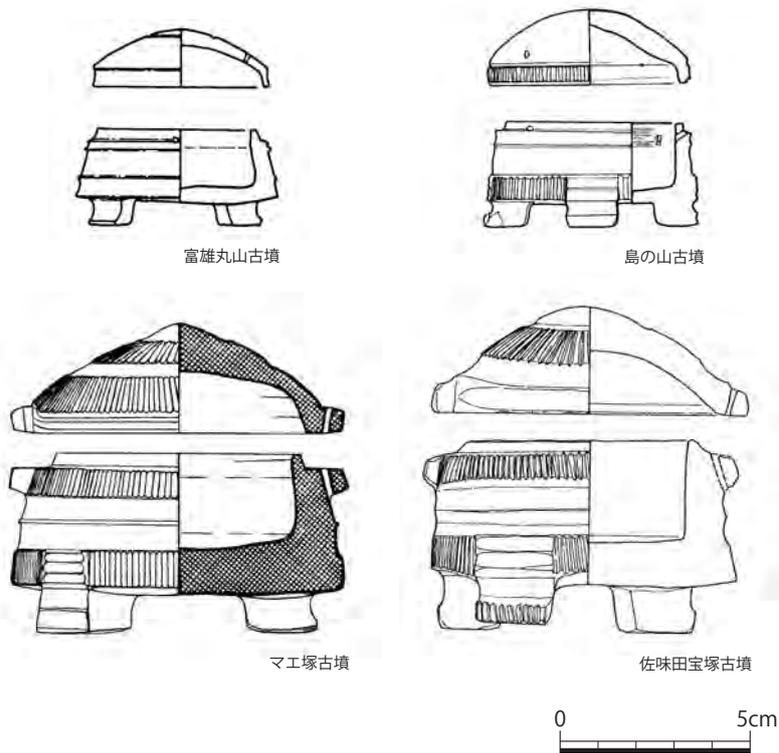


図8 奈良盆地の円形有脚合子形石製品 (S=1/2)

ら高いと判断するが、肝心の身本体については現状では不明と言わざるをえない。辻土坑4出土の木製品のなかにも該当する容器は見出せない。ただし、内傾する外形の容器と結合する形であった可能性は高く、その場合は青谷上寺地遺跡にみられるような弥生時代後期の内傾する身が造形されている精製刳物桶（野田・茶屋2005、第33・34図-130～132等）の系譜を引く未知の木製合子<sup>(13)</sup>が古墳時代前期初頭に纏向遺跡で造形されていた可能性を考えたい。さらにそこには平面円形で側面形が低平な山形になるおそらく刳物の木製蓋（野田・茶屋2005、第46・47図-195～197等に由来か）がともなっていた。そしてその身部分と結合した辻土坑4例の脚状木製品の形態が石製品に写され、円形有脚合子形石製品が成立したと推測する。木製装飾（透彫）高杯と精製刳物腰掛の埴輪化・石製品化がメスリ山古墳や佐紀陵山古墳で達成されている状況を見ると、セットで同じ王権中枢の最高位の祭儀で用いられた脚状木製品に由来する円形有脚合子形石製品もそれらの古墳から出土しており、同様の仮器化が奈良盆地の最大級の前方後円墳に関わっておこなわれたことは確かであろう。

以上のとおり、今回検討した辻土坑4出土脚状木製品

は、纏向遺跡でおこなわれた最高位の祭儀で用いられた特に重要なアイテムの一つであり、木製装飾（透彫）高杯、纏向型団扇形木製品・翳形木製品、精製（青谷型）刳物腰掛とともに奈良盆地の最大級の前方後円墳で達成された仮器化の対象となったものであった。辻土坑4例はこの形状では唯一の事例であり、その後の展開については明らかにすることはできないが、今回特殊な木製品群として検討してきたセット関係でみると、古墳時代前期前半での纏向遺跡内での展開、乙木・佐保庄遺跡への展開等、奈良盆地東南部での展開とともに同時期には、湖南・湖東へ、そして北陸にも遡上する。

特殊な木製品群による祭儀は、同じセット関係では古墳時代前期前半以降はほとんどみられなくなり、継続しなかった可能性がある。それぞれの器物はその後も製作・使用されているものもあるが、最高位の祭儀のアイテムとしての木製品群は別の器物に更新された可能性がある（鈴木裕明2019）。そして更新される際に、最高位の前方後円墳の埴輪、副葬された石製品に仮器化されるのではないかと現状の資料から推測する。

推測を重ねた部分もあり、課題も残るが、これまで必ずしも用途・性格が明らかでなかった纏向遺跡辻土坑4

出土脚状木製品が、古墳時代前期初頭～前半に王権中枢でおこなわれた祭儀で使用する特殊な木製品群の一つであり、そのような祭儀を主宰した首長が葬られる古墳の副葬品として仮器化されたものであったと結論付けた。

本稿は、JSPS 科研費 20H01360 の成果の一部である。また、本稿の内容の一部は、「木製品からみた3世紀の出雲と大和」『令和3年度 島根大学総合博物館アシカル講座』(2022. 3. 19) で発表したものである。

### 謝辞

本稿執筆にあたっては、下記の方々・機関からのご教示をいただき、資料調査等にあたってご便宜を図っていただいた。末筆ながら記して感謝申し上げます。

青柳泰介、飯塚武司、会下和宏、神柱靖彦、竹村明美、中川 寧、端 猛、樋上 昇、久田正弘、湯村 功、渡部弘美(敬称略、50音順)

青谷かみじち史跡公園準備室、(公財)石川県埋蔵文化財センター、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、島根県埋蔵文化財調査センター

### 註

- (1) 本稿では、纏向遺跡辻土坑4から共伴して出土している 埴輪や古墳副葬の石製品に写される実物の木製装飾高杯、団扇形木製品、精製刳物腰掛、そして今回検討する脚状木製品を特殊な木製品群と総称する。
- (2) 報告書の記載(辻1976)では、脚部外面の凹面下半に横位の細かいヤリガンナ仕上げの痕跡残るとしているが、現状では判然としない。
- (3) 報告書の記載(石野1976a)では、中層は植物層1-黒褐色土層3-植物層2が該当し、本稿の図2断面図アミ部分の植物層1・炭層・植物層2が報文中層の植物層1に、黒褐色土層3は同じ、植物と黒褐色土・植物層3が報文中層の植物層2と解釈した。なお、報告書の観察表では中層は黒粘、黒粘2・4、植物上層、植物1・2と表記されている。
- (4) 2001年以降の青谷上寺地遺跡の鳥取県埋蔵文化財センターによる保存目的の発掘調査により、第5次調査(北浦ほか2006)・第10次調査(君嶋2010)で反りタイプの脚状木製品がそれぞれ1点出土している。

- (5) 青谷上寺地遺跡例を典型例とする精製刳物腰掛で、特に脚の装飾において、脚間をアーチ状に仕上げ、椀木状の横木で各脚をつなぐ形に作り出し、横木から連続し脚側辺に沿った一段低い張り出しを設けているものを「青谷型」刳物腰掛とした(鈴木裕明2021)。本稿でもこれを踏襲し、精製(青谷型)刳物腰掛と表記している。また、刳物脚付槽にも同様の装飾が脚部に施されたものがあり、これらも青谷型の刳物脚付槽としている。
- (6) 青谷上寺地遺跡にみられる花卉の装飾が浮き彫りされた木製装飾高杯は、報告書等で花卉高杯と通称されており(野田・茶屋2005等)、本稿でもそれにならい木製装飾(花卉)高杯と表記している。
- (7) 纏向遺跡にみられる透かし彫りの装飾をもつ木製装飾高杯については、透かし彫り高杯(樋上2015)あるいは透かし彫りの装飾をもつ高杯(飯塚2003)と呼ばれており、本稿でもこれを引用して木製装飾(透彫)高杯と表記している。
- (8) 古墳時代前期初頭～前半にみられる精緻な作りで均整のとれた形状の団扇形木製品の典型例で、纏向遺跡からの出土例が最も多く、分布の中心になっている。筆者の論考(鈴木裕明2001)で団扇形木製品③類としたもので、本稿では纏向型団扇形木製品としている。なお、乙木・佐保庄遺跡にのみみられる纏向型団扇形木製品の発展形で長柄の木製品は、前述の筆者の論考では団扇形木製品⑥類とし、祭儀の中心人物に対して従者がかざした翳であろうとした。本稿では翳形木製品と表記している。
- (9) 筆者の論考(鈴木裕明2001)で団扇形木製品⑤類としたものである。
- (10) 伝播ルートについては、山陰から北陸、湖東・湖南を経由して奈良盆地東南部への可能性と纏向遺跡と乙木・佐保庄遺跡における外来系土器のなかでの山陰系土器の占める割合の高さ(石野・関川1976、鈴木裕明2005b)から山陰から直接の可能性も考えられる。今後の検討課題である。
- (11) 湖東・湖南、北陸だけでなく、濃尾平野の岐阜県大垣市荒尾南遺跡においても古墳時代前期前半の溝から纏向型団扇形木製品と弧帯文が施文された装飾板が共伴して出土している(鈴木元2008)。
- (12) 青柳泰介氏は古墳時代の導水施設に使用された槽付き木樋について、近年の出土例等から古墳時代前期初頭前後に北陸～北部九州にかけての近畿中枢以外の地域で成立し、ほどなく奈良盆地に伝えられた可能性を考えている(青柳

2019)。奈良盆地への特殊な木製品群の伝来過程と使用の場の変化と整合する重要な指摘である。

(13) 岡寺良氏は前述の円形有脚合子形石製品のモデルの無文の刳物脚付き容器について、具体例として姫原西遺跡出土の内傾する身の底面外周に短い脚が作り出された刳物桶と側面が低平な山形となり上面に同心円状の刳り込みのある刳物蓋をあげている(岡寺2010)。

## 参考文献

- 青柳泰介 2019 「古墳時代の導水施設に使用された槽付き木樋について」《特集木器・木製品研究の可能性》『古代学研究』第222号 古代学研究会 pp. 28-35
- 赤塚次郎 1999 「容器形石製品の出現と東海地域」特集古墳時代前期の石製品『月刊考古学ジャーナル12』No. 453 ニューサイエンス社 pp. 6-11
- 足立克己編 1999 『姫原西遺跡』一般国道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ 鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 飯塚武司 2003 「仮器・宝器になった木製容器」『法政考古学』第30集 法政考古学会 pp. 171-187
- 飯塚武司 2017 「古墳時代の始まりの木器写しの器物と弧帯文(帯状文様)を刻む木器」『東京都埋蔵文化財センター 研究論集XXXI』東京都埋蔵文化財センター pp. 1-23
- 石川ゆずは 2019 「纏向遺跡辻土壇4出土装飾木製高杯の系譜」《特集 木器・木製品研究の可能性》『古代学研究』第222号 古代学研究会 pp. 1-9
- 石野博信 1976a 「Ⅱ. 遺構篇 第1章 古墳時代前期の遺構 2. 土壇 (ハ) 纏向3式期 土壇4」『纏向』桜井市教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所 pp. 53-54
- 石野博信 1976b 「Ⅴ. 考察篇 第4章 三輪山麓の祭祀の系譜—大型土壇と建物跡—」『纏向』桜井市教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所 pp. 506-509
- 石野博信 1976c 「綜括 5. 三輪山麓の祭祀の系譜」『纏向』桜井市教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所 pp. 584-585
- 石野博信・関川尚功編 1976 『纏向』桜井市教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所
- 井上主税 2025 「Ⅴ 各論 5 桜井茶臼山古墳の石製品」『桜井茶臼山古墳の研究—再発掘調査と出土遺物再整理—』奈良県立橿原考古学研究所・(一財) 橿原考古文化財団 pp. 199-204
- 岩崎茂編 2001 『下長遺跡発掘調査報告書Ⅷ』守山市文化財調査報告書 守山市教育委員会
- 植田文雄編 1993 『斗西遺跡(2次調査)』能登川町埋蔵文化財調査報告書第27集 能登川町教育委員会
- 上原真人 1994 「入れもの—先史時代の木工文化」『季刊考古学』第47号 雄山閣 pp. 18-23
- 岡寺良 2010 「古墳時代の合子形石製品」『待兼山考古学論集Ⅱ—大阪大学考古学研究室20周年記念論集—』大阪大学考古学研究室 pp. 341-367
- 河上邦彦編 2002 「第3章 各古墳の遺構と遺物 36 宝塚古墳」『馬見古墳群の基礎資料』橿原考古学研究所研究成果第5冊 奈良県立橿原考古学研究所 pp. 81-110
- 北浦弘人編 2001 『青谷上寺地遺跡3 一般国道9号米子道路埋蔵文化財発掘調査報告書』鳥取県埋蔵文化財調査報告書72 (財) 鳥取県教育文化財団
- 北浦弘人ほか編 2006 『青谷上寺地遺跡8 第2次～第7次発掘調査報告書』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告10 鳥取県埋蔵文化財センター
- 北野博司編 1992 『千代』石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター
- 君嶋俊行編 2010 『青谷上寺地遺跡11 第10次発掘調査報告書』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告31 鳥取県埋蔵文化財センター
- 小島俊次編 1969 『マエ塚古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第24冊 橿原考古学研究所
- 西藤清秀編 2019 『島の山古墳—前方部埋葬施設の調査—』奈良県文化財調査報告書第183集 奈良県立橿原考古学研究所
- 下澤公明編 2001 『下庄遺跡 上東遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書157 岡山県古代吉備文化財センター
- 鈴木敏弘 1994 「Ⅰ. 集落内祭祀の出現(Ⅱ)」『和考研究—特集集落内祭祀の研究—』創刊号 和考研究会 pp. 1-29
- 鈴木元編 2008 『荒尾南遺跡Ⅲ』大垣市埋蔵文化財調査報告書第18集 大垣市教育委員会
- 鈴木裕明 2001 「団扇形木製品と塵尾」『茨城大学考古学研究室20周年記念論文集—日本考古学の基礎研究—』茨城大学人文学部考古学研究室 pp. 330-355
- 鈴木裕明 2003 「古墳時代前期の団扇形木製品の展開とその背景」『初期古墳と大和の考古学』学生社 pp. 361-371
- 鈴木裕明 2005a 「第Ⅳ章 考察 第3節 乙木・佐保庄遺跡出土木製品について (3) 翳(団扇)形木製品について」『乙

- 木・佐保庄遺跡』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第92冊 奈良県立橿原考古学研究所 pp.285-288
- 鈴木裕明編 2005b 『乙木・佐保庄遺跡』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第92冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 鈴木裕明 2019 「埴輪化する木製品 《特集木器・木製品研究の可能性》」『古代学研究』第222号 古代学研究会 pp.18-27
- 鈴木裕明 2021 「刳物腰掛に関する一考察—乙木・佐保庄遺跡出土木製脚片の検討から—」『考古学論叢』第44冊 奈良県立橿原考古学研究所 pp.49-64
- 清喜裕二 2005 「第3章 考察 5. 桜井茶臼山古墳出土の石製品」『桜井茶臼山古墳の研究』大阪市立大学考古学研究所報告第2冊 大阪市立大学日本史研究室 pp.95-114
- 伊達宗泰編 1977 『メスリ山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第35冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 辻俊和 1976 「Ⅲ. 遺物篇 第1章 古墳時代前期の遺物 4. 木製品 (4) 辻地区土坑4出土の木器・木製品」『纏向』桜井市教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所 pp.296-322
- 徳田誠志 1992 「書陵部所蔵の石製品Ⅱ (奈良県 その二)」『書陵部紀要』第43号 宮内庁書陵部 pp.72-87
- 中井均編 1988 『入江内湖遺跡 (行司町地区) 発掘調査報告書』米原町埋蔵文化財調査報告Ⅸ 米原町教育委員会
- 永井宏幸・赤塚次郎編 2009 『朝日遺跡Ⅷ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第154集 (財) 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
- 西谷真治 1970 「古墳出土の盒」『考古学雑誌』第55巻第4号 日本考古学会 pp.253-279
- 野田真弓・茶屋満編 2005 『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告1 木製容器・かご』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書8 鳥取県埋蔵文化財センター
- 萩原儀征編 1987 『纏向遺跡発掘調査概報』桜井市埋蔵文化財発掘調査概報1987-7 桜井市教育委員会
- 橋本輝彦編 1997 「纏向遺跡第90次発掘調査概要報告『桜井市平成8年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市埋蔵文化財センター発掘調査報告書第18集 桜井市教育委員会
- 橋本輝彦編 2013 『纏向遺跡発掘調査概要報告書—トリイノ前地区における発掘調査—』桜井市埋蔵文化財調査報告書第40集 桜井市纏向学研究所
- 八賀晋 1982 「富雄丸山古墳出土遺物」『京都国立博物館蔵 富雄丸山古墳 西宮山古墳 出土遺物』京都国立博物館 pp.1-28
- 林大智編 2012 『千代・能美遺跡』(財) 石川県埋蔵文化財センター
- 林大智 2013 「第2章 木製品研究の現状と課題 第7節 北陸における木製品研究の現状と課題」『木製品から見た古代の暮らし』島根県古代文化センター pp.92-110
- 樋上昇 2010 「第Ⅱ章 首長関連木製品の研究 第1節 木製容器の行方—愛知県朝日遺跡04Ab区SD02出土資料から—」『木製品から考える地域社会—弥生から古墳へ—』雄山閣 pp.63-75
- 樋上昇 2015 『『北陸型』木製品の出現と展開』『フォーラム小松発・北陸新幹線ルートの弥生文化を探る』小松市埋蔵文化財センター pp.39-44
- 樋上昇 2016 「首長と王の所有物 みせびらかす器、隠匿する器」『樹木と暮らす古代人 木製品が語る弥生・古墳時代』歴史文化ライブラリー434 吉川弘文館 pp.124-165
- 久田正弘編 2024 『白江梯川遺跡Ⅴ』梯川河川改修に係る埋蔵文化財発掘調査報告書5 (公財) 石川県埋蔵文化財センター
- 平井美典編 2008 『柳遺跡Ⅳ』草津川改修事業ならびに草津川放水路建設事業に伴う発掘調査報告書Ⅺ (財) 滋賀県文化財保護協会
- 穂積裕昌 2000 「Ⅱ 木製品の解説 第2節 SD1 出土木製品 4 容器 ② 曲物脚」『六大A遺跡発掘調査報告 (木製品)』三重県埋蔵文化財調査報告115-17 三重県埋蔵文化財センター pp.25-26
- 牧本哲雄ほか編 2018 『松原田中遺跡Ⅲ』一般国道9号 (鳥取西道路) の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXIX (公財) 鳥取県教育文化財団調査室
- 松本洋明編 2004 『史跡赤土山古墳第4次～第8次発掘調査概要報告書』天理市教育委員会
- 山田昌久 1997 「Ⅱ. 道具 1. 岐阜県飛騨みやがわ考古民俗館収蔵の道具 1) — 2 考古資料の曲げ物研究を器具研究に—」『人類誌集報 1997』東京都立大学考古学報告2 漆利用の人類誌調査・飛騨山峡の人類誌調査グループ pp.24-26
- 湯村功編 2002 『青谷上寺地遺跡4 一般国道9号米子道路埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』鳥取県埋蔵文化財調査報告書74 (財) 鳥取県教育文化財団

## 図出典

図1 石野・関川 1976 図 151-13 を再実測して作成。

図2 平面・断面図は石野・関川 1976 図 30 を一部改変して作成。  
木製装飾(透彫)高杯は石野・関川 1976 図 136 より、剥物腰掛・  
団扇形石製品は石野・関川 1976 図 152- 6・8 を再実測して、  
それぞれ作成。

図3 山田 1997 第 20 図上段右を再トレースして作成。

図4 2 は久田 2024 第 121 図を、3～15 は野田・茶屋 2005  
第 73 図-320～323・第 74 図 324～330・第 75 図 331～332 を、  
それぞれ一部改変して作成。

図5 16～18 は野田・茶屋 2005 第 75 図-334～336 を一部改  
変して、19 は足立 1999 第 146 図- 4 より、20 は久田 2024 第  
99 図-307 より、それぞれ作成。

図6 上段の木製装飾(花卉)高杯は湯村 2002 第 288 図-270  
より、精製剥物腰掛は北浦 2001 第 158 図より、団扇形木製  
品は足立 1999 第 118 図-6 より、一部改変して作成。下段の  
団扇形木製品は鈴木裕明 2001 第 1 図を一部改変して、翳形  
木製品は鈴木裕明 2005b 図 97-1003 より、精製剥物腰掛は鈴  
木裕明 2021 図 1 より、それぞれ作成。

図7 国土地理院ウェブサイト 地理院 Vector 白地図  
(<https://maps.gsi.go.jp/vector/#7/36.104611/140.084556/&ls=vblank&disp=1&d=1>) を加工して作成。

図8 富雄丸山古墳例は八賀 1982 第 4 図右より、島の山古墳  
例は西藤 2019 図 22- 合子 1・3 より、マエ塚古墳例は小島  
1969 第 19 図より、佐味田宝塚古墳例は河上 2002 図 102 より、  
それぞれ一部改変して作成。